

幼稚園教師と保護者が重視する教員資質能力についての考察
—予備調査をもとにした聞き取り調査から—

Some Consideration on the Expected Competence and Ability of Teachers by
Kindergarten Teachers or Parents
- Study of Current Interview Based on the Primary Survey-

西川正晃* 森田 健* 矢田正一* 寅丸尚恵* 濱名 浩*

Masaaki NISHIKAWA Ken MORITA Shoichi YATA Hisae TORAMARU Hiroshi HAMANA

抄 録

本学教育総合研究所の教員資質に関する研究プロジェクトでは、2007年度に幼稚園と小学校を対象に予備調査を行った。その結果についてさらに深く分析するため、2008年度には、教員、保護者、地域の人を対象に聞き取り調査を行うことになった。

本稿では、幼稚園教師や保護者が重視している3つの教員資質能力に絞って、教員、保護者、地域の人から聞き取り調査をした結果とその考察を述べる。

1. はじめに

本学では、2005年度から人間行動学科にこども学専攻を立ち上げ、保育士資格、幼稚園教諭免許が取得できるようになり、2006年度からは教育福祉学科こども学専攻という学科再編と同時に、小学校教諭免許が取得できるようになった。2007年度からは学部が人間学部から教育学部に学部名称替えされ、専攻の設置目標がより明確に「教育保育に関わる人材養成をすること」と打ち出されるようになった。

このことに相伴って、専攻の教員を中心として、教員の資質についての研究プロジェクトが2007年度からスタートし、文献調査に加えて、大学近辺の教師、保護者を対象とした質問紙調査(予備調査)を行うようになった。これは、大学教育の中で、どのような資質能力を重視して学生を教育し、教育保育に携わる人材として送り出すのか、その基礎研究とするためである。

ここでは、予備調査¹⁾の結果、教師が重視している教員資質能力の中で、その割には保護者の必要感が少ない資質となっている「保護者とのコミュニケーションがとれること」「同僚とのコミュニケーションがとれること」、また保護者が重視している教員資質能力の中で、その割には教師の必要感が少ない資質となっている「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとること」の3つについて、教師、保護者、地域の人の視点がどこにあるのかを、聞き取り調査結果から考察する。

* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

2. 予備調査結果と聞き取り調査計画

(1)予備調査実施について

幼稚園教師の資質能力について、一昨年の12月にアンケートによる予備調査を行い、昨今の幼稚園教師と保護者の考える「幼稚園教師の資質能力」の一端を知ることができた。ただし、このアンケート調査はあくまで予備調査であったため、絶対数の少なさや地域性を考慮しても、質問内容そのものにまだ不備が見られるのではという懸念が指摘されてきた。

そこで、今後予定されている本調査の前に教師、保護者、地域の三者に予備調査の結果についての聞き取り調査を行い、予備調査の補強をすることになった。

(2)予備調査結果

予備調査結果は『教育総合研究叢書第1号』にまとめて掲載されているが、その中で、アンケート調査を行った34項目の「教員の資質能力」について、幼稚園教員と保護者がそれぞれの程度の必要性を感じているかを一覧表にしたものが次ページの表1である。

これを見ると、教師が重視する教員の資質能力では、第1位が「子ども一人ひとりの個性を大切に」(95.7%)、第2位が「保護者とのコミュニケーションがとれる」(91.3%)、第3位が「子どもが好きである」「子どもの目線に立ってコミュニケーションができる」(各87.0%)となっている。一方、保護者が重視する教師の資質能力では、第1位は「子どもが好きである」(88.7%)、第2位が「子どもの目線に立ってコミュニケーションができる」(84.4%)、第3位が「子ども一人ひとりの個性を大切に」(80.9%)となっている。

これを見ると、上位に挙げられた項目はほぼ似通っているように思えるが、「保護者とのコミュニケーションがとれる」のように教師の考えと保護者の思いにかなりの開きがあるものもある。要するに教師と保護者の間で、必要性を感じる教員の資質能力が異なっているものもあることが窺えるのである。

(3)聞き取り調査の計画

①調査対象者

神戸市私立A幼稚園……保護者2名、教師2名、地域住民2名

(聞き取りは、大学側2名)

②調査日時

2008年12月9日(火)午後2時～5時(上記3者夫々40分～50分)

③調査内容

次の3項目について、それぞれの立場からこの結果についてどう考えるかを聞き取る。さらに、その他の項目についても話の流れの中で出てきた場合は聞き取ることにした。

- ・教師が必要性を感じている(70%以上)が、保護者との開きが顕著なもの

NO.13 「保護者とのコミュニケーションがとれる」(差42.5%)

NO.14 「同僚とのコミュニケーションがとれる」(差38.3%)

- ・保護者が必要性を感じている(70%以上)が、教師との開きが顕著なもの

NO.6 「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる」(差16.3%)

- ・教師、保護者共に意識が低い、今後重要と考えられる項目について

NO.33 「地球的規模の問題への関心がある」

NO.34 「国際社会で通用する」

<表1> 教員の資質能力について教師と保護者が必要性を感じている割合
(幼稚園教師と保護者のうち、意識の差が顕著な項目…背景が白の部分※)

NO	教師	保護者	差	ランク	
1	87	73.7	13.3		子どもをひきつける表現力がある
2	87	57.4	29.6	4	誰とでも協力できる
3	78.3	57.1	21.2	5	自らの資質や能力を高めようとする
4	47.8	39	8.8		幅広い教養を持っている
5	30.4	31.7	-1.3		自分自身が夢を抱いている
6	60.9	77.2	-16.3	-1	嘘やいじめに対して毅然とした態度を取る
7	43.5	43.1	0.4		あこがれの対しようとなるような人間的魅力にあふれている
8	69.6	61.5	8.1		子どもの模範となるような言動ができる
9	52.2	21.7	30.5	3	得意分野を持っている
10	95.7	80.9	14.8		子ども一人ひとりの個性を大切にする
11	87	88.7	-1.7		子どもが好きである
12	87	84.4	2.6		子どもの目線に立ってコミュニケーションができる
13	91.3	48.8	42.5	1	保護者とのコミュニケーションがとれる
14	78.3	40	38.3	2	同僚とのコミュニケーションがとれる
15	56.5	52.2	4.3		教科内容の知識が豊富である。
16	60.9	71.2	-10.3	-2	子どもの関心を引き出しながら授業(保育)ができる
17	56.5	47.8	8.7		授業(保育)技術が身に付いている
18	52.2	39.5	12.7		子どものしつけができる
21	30.4	38.9	-8.5		子どもの成長・発達に関する専門知識が豊富である
22	43.5	54.1	-10.6		子どもの心のケア・教育相談ができる

23	69.6	71.7	-2.1		子どもの評価が公正・的確である
24	52.2	69.3	-17.1		子どもの失敗をおおらかに受け止められる
25	30.4	33.3	-2.9		考えたことを実行できる
26	13	7.8	5.2		情報機器が活用できる
27	73.9	62.9	11		教師としての使命感, 情熱, 意欲を持っている
28	34.8	24	10.8		社会の一員として世の中の変化に敏感である
29	69.6	58.5	11.1		社会的な規範を守る
30	60.9	55.1	5.8		多様な考え方・見方を受け入れられる
31	30.4	18.5	11.9		社会に貢献しようという意識が高い
32	21.7	16.1	5.6		地域の実情について深く理解している
33	13	9.8	3.2		地球的規模の問題への関心がある
34	8.7	2.4	6.3		国際社会で通用する

※ 70%以上の指示があるもののうち、差が大きいもの (NO. 6、13、14)

3. 結果と考察

(1) 保護者とのコミュニケーションがとれること (NO. 13)

① 教師による視点

幼稚園教師2名より聞き取り調査を行った。教員歴8年の教師と、教員歴3年の教師が聞き取りの対象である。この項目では、教師は90%を超える高いポイントに対し、保護者は50%を下回り大きな開きとなった。大きな開きについて次のような考えを聞き取ることができた。

- ・保護者とのコミュニケーションを大切にすることによって、家庭の姿も見えてくるので、連絡を密にしている。
- ・子どもが幼稚園では見せない姿が見えてくる。
- ・家庭と一緒に子どもを育てたいとの思いでコミュニケーションをとっている。
- ・保護者の数値が低いことは理解しにくいだが、幼稚園からご家庭に連絡を密にしているので、特にご家庭から連絡をとる必要がない、と信頼されているともとれる。そうであるなら、大変うれしい数字だと思える。
- ・バス通園児の保護者とはなかなかお話しする機会が少ないことも多少は影響があるかもしれない。
- ・幼稚園の年中ともなると、園児が家庭で園での日々の話をよくするので、様子はよく分かっているから必要を感じない、ということも考えられる。

以上から、この園では平素から保護者とのコミュニケーションを大切にしており、連絡を密にす

の方針から保護者とのコミュニケーションには強い自信が感じられる。一方、保護者からすると、この点について安心感が強く、保護者側からコミュニケーションをとる必要があまりなく、低い関心となっているようである。保護者からすると、必要ではあるが、ほかにもっと大切なことがあると考えていると推察できる。

② 保護者による視点

教師は91%が保護者とはコミュニケーションがとれていると感じているが、保護者は50%に満たず、コミュニケーションをとってほしい気持ちが有り、教師と保護者意識の歴然とした違いと考えられる。意識の差として考えられる原因は、登降園の方法である。通園バス利用が50%、残りの50%が徒歩通園である。徒歩通園の保護者は、朝夕、教師と顔を合わせて子どもの様子を聞き、親も伝えたいことを直接話せるので、コミュニケーションは充分取れていると感じている。子どもの様子も直接見ることができ、徒歩通園の保護者は教師とも親しい関係ができ、コミュニケーションの意識も高まっている。一方、バス通園の保護者は、連絡ノートでコミュニケーションをとっている。直接教師と話ができるのは、「保育参観」や「懇談会」など行事の時を利用するか、前もって電話連絡して行われている。このことから保護者から見るとコミュニケーションがとれるが50%に満たない結果が出たと考えられる。

バス通園の保護者は、担任教師と保護者が毎日顔を合わせることはない。通園バス担当の日であっても、担当クラスの子どものだけでなく、幼稚園全体の仕事として園児を安全に送迎することが目的であり、責任がある。保護者から「連絡をしても他クラス担任には伝わりにくい」との声があったが、保護者は担任に連絡ノートで、直接伝え合いができるので納得している。バス通園の担当日は、子どもを全面的に受けとめ安全配慮を行う。走行中は特に目が離せない状態になる。保護者は、子どもの気持ちを受けとめてもらい安心して利用できると感じている。

連絡ノートの利用は、保護者から担任に伝えたい事や質問を記入し、担任の返事を読んで理解する方法である。質問は必要な時に記入すれば、その日に保護者に伝わる。教師の方は、特に伝えることがなければ、定期的にメッセージを記入し、伝えている。バス通園の保護者が担任と直接話を希望する時は、前もって電話連絡をして行われている。

行事の日を利用して話が出来ても、教師と保護者が毎日顔を合わせていないので、保護者は「コミュニケーションがとれる」意識までは届いていない様である。通園方法の違いはあるが、保護者は日々の子どもの様子から、教師を信頼し、幼稚園を評価している。特に必要でなければコミュニケーションの必要性も意識がなく、幼稚園を信頼して任せている面も伺える。通園時間の幅が2時間あり、教師の体制作りにも努力が伺える。徒歩通園の保護者は、いつも担任と顔を合わせ直接話ができるので満足し、コミュニケーションがとれていると感じ、連絡ノートで知らせ合う必要も感じていない。

コミュニケーションの意識の差は、一人目の通園では、親も慣れていないが、二人目三人目となると、教師と長い付き合いになり話がし易くなる。最初は遠慮もあり、気が引けていたが、会話に

慣れると意識も高まっていくと感じている。「コミュニケーションがとれている」と感じている保護者も、担任しか話をしない親が多い。「他の知らない先生には何を話したらよいかわからない」と思っている。二人、三人目の子どもになると、知っている教師が増え、声掛けを行うと話の出来る教師が増えていく。話の内容も、広がりや深まりが加わり、コミュニケーションの内容も深まっていくと受けとめる。

③地域の人からの視点

「保護者とのコミュニケーションがとれる」などの項目は、教師のほとんどが絶対に必要なことと感じている反面、保護者にとっては、比較的半分ぐらいの支持しかされなかった。それに対して、徒歩通園保護者とバス通園保護者の感覚の違いを挙げて、バス通園の保護者がぐっと低くなっていると考えられていた。徒歩通園の保護者の場合、毎日先生と顔を合わせ、子どもや幼稚園に対する情報をたくさん持っている一方で、バス通園の保護者は、行事のみの顔合わせになって、教師と毎日の会話やコミュニケーションがなくても、子どもが元気に帰っているから良い、無事に過ごせているから良いと考えているのではないかと。

バス通園で子どものことを知りたいと思う保護者のみ、自分の方から連絡帳や行事の時に先生に食いつき直接話をするが、就労している母親や、子どもが無事に行って無事に帰ってきて笑っていれば良いと考えている保護者は、コミュニケーションはそんなに必要ではなくなり、なくても良いと考える傾向があると指摘している。

連絡帳の活用でも保護者に差があり、バス通園の保護者で1年に3冊も使い保育者とやり取りする者もいれば、1冊も使わない者もいる。この点は、個人差が非常に大きいのではないかと。教師は、求めてくる保護者に十分コミュニケーションをとっているつもりでも、保護者の個人個人のレベルでは、教師の意識よりはるかに低いコミュニケーションとしか感じられていないのではないかと、分析している。

保護者は問題がなければ、任せてあるという意識と、先生も忙しいからやめておこうという意識が働くようで、必要を感じないときにはコミュニケーションの意味を感じない実態があるのではないだろうか。

(2)同僚とのコミュニケーションがとれること (NO. 14)

① 教師による視点

教師が78%に対して、保護者が40%と大きな開きがあった。この点についての聞き取りの主な内容は次のとおりである。

- ・先生間ではかなり重要視している。
- ・連携プレーなしにはクラス運営も成り立たない。それに対して保護者からの立場からすると、お母さん同士の話では先生がどうのということよりも、自分の子どもがどうかという話になり、先

生同士のコミュニケーションという項目には、あまり関心がないのではないかと。

- ・むしろ当然のことと理解されている。
- ・多くの先生がいても、関わる先生は少ないので、比較のしようがなく、関心が低いとも思われる。

以上から、教師には欠かせない「同僚とのコミュニケーション」であっても、保護者からすると分かりづらいこともあるが、そこまで関心が向かないようである。教師にとっては、クラス間の情報交換や、多くの年間行事に際しても助け合って達成しなければならないことも多く、同僚とのコミュニケーションは欠かすことができないことであろう。バスで遠くから通園している園児も多く、近くに幼稚園がありながらこの幼稚園を選ばれていることは、すでにこの園への信頼感が強く、この質問については（1）と同様に、関心が低いと思われる。

② 保護者による視点

教師は78%、保護者は40%の支持であるが、保護者の理由はよくわからず「教師は仲が良く、良い感じ」「いつも楽しそうにしている」と捉えている。単に「意識が低い」のでもなく、「関心の高い」質問ではなかったということで「現実はいまよくいっている」と感じている。分析すれば、強い肯定が40、弱い肯定が58で、保護者は、必要だと感じているが、「絶対に必要40」と「大事です58」と、読み取りができる。保護者は、現状を特に問題なし、と感じている。質問紙に順番に付けていく中で、この項目は重要であると感じて記入している。保護者は、幼稚園が平穏で教師も同僚とのコミュニケーションがとれており、教師間の人間関係も良好であると感じている。幼稚園教育にも反映され、様々な問題や課題にも、相手の気持ちを受けとめ、活発な意見交換がされていると考える。

③ 地域の人々からの視点

「同僚とのコミュニケーションがとれる」というアンケートの質問に対して、幼稚園教師の数字が高く、保護者の数字が比較的低い結果となっている。

「同僚とコミュニケーションがとれる」には、伝言事については正しく伝えてほしい気持ちはあっても、主に考えているのは、我が子のクラスだけがうまくいけば良いという考えが強いからではないか。我が子のクラスさえ、ちゃんと保育され、我が子をしっかり見てくれたら良い。隣の先生同士、仲よいことは必要ではあるけれども、そこまで期待はしていないと読み取っている。「先生は子どものことだけを見ていたらいいのに」というようなことを聞いたりすると、同僚とのコミュニケーションを求めるよりも、保護者と教師よりも、子どもと教師のコミュニケーションを求めるのが、保護者の感情であり主な意見ではないかと見ている。

(3)嘘やいじめに対して毅然とした態度をとること（NO.6）

① 教師による視点

前の二つの項目に対して、逆に保護者の数値が高く、教師の数値が保護者を下回って一番開きのあったものである。保護者の数値が77%と高く、教師と開きがある。この点について聞いてみた。

- ・保護者の立場からはこの項目は非常に関心が高く、きちんと対処してほしいと強く思っておられる。
- ・教師の立場からすると、毅然とした態度という表現には抵抗があり、嘘をつくに至った、いじめをするに至ったそこまでの過程に、その子に何があったのかを一緒に考えて理解してあげて寄り添っていくことを大切にしたい。
- ・毅然とした態度という言葉に冷たさを感じたので低い数値となったと思われる。
- ・毅然として、「はい、あなたはだめ」ではなくて、やはりその裏側を察して、ぜひ一緒に考えてあげたいと思う。
- ・年長児になると、嘘やいじめが見られるようになるが、年中や年少では年齢的にもまだ事例があまりない。
- ・女の子のほうが早く始まり、内容が男児に比べてきつい。

以上の聞き取り結果から、質問の毅然とした態度という言葉が教師には抵抗があったようである。また保護者の立場と違って、教師は嘘やいじめに対して、そこに至った過程について、園児と一緒に考えてあげたいという気持ちが強い。また年齢的にもこのような事例はまだ少なく、保護者の心配ほど危機感がなく、この数値になったと考えられる。

② 保護者による視点

社会問題にもなっているが、保護者の数字が高く、教師が低い結果である。「毅然と」の言葉が、厳しくではなく、子どもにきちんと「それはいけない」と分かるように教えてほしい。小学生で年齢が上になると、もっと強く叱ってほしいと、年齢による対応の差を希望している親もいる。教師の年齢は比較的若い方が多いが、事例に対して、保護者の「毅然と指導していただきたい」と願う親の気持ちが重なって、高くなったと解釈できる。幼稚園の年代で、どの程度の事例があるかについて、いじめはあまり聞いたことがない。嘘や可愛い嘘は聞いたことがあるが、駄目というより可愛らしい嘘と捉えた事例がある。いじめのケースはない。

年長児になると、女の子が「友達じゃないのに」と言う子が出てきて、それもいじめなのかと思いい、小学校になったら出てくると聞いて、不安になっている親もいる。「言葉の暴力」で相手がどれだけ傷ついているのかは幼稚園での教育課題である。年長になるとグループ的なものができ、特に女の子が仕切って、入れない子は男の子と遊んでいる現実がある。保護者からも、教師に必要な要素、能力、資質は大事なものであると指摘があった。

年長児集団のダイナミズム作りも、目の前の大切な課題であると考えられる。子どもの年齢が低いと、可愛い、順調に育ってほしい、など基本的な願いが強調される。言葉が出て身体も成長し、親と子どもから、親と友達そして自分にと範囲を広げていく。その育つ段階で、愛情をこめて、大切なことは大人が伝える責任があり、小学校に行く年齢になって急に求めても無理がある。子どもの背景

も受けとめ、幼稚園の年齢の子どもに理解できるように教え、体験させ、教師全員で考え解決していく過程が重要であると考え。

③ 地域の人々からの視点

「うそやいじめに対して毅然とした態度をとる」ということに対して、保護者は非常に高く教師に求めている一方、ほかに高い資質を見出している。地域の人々は、小学生に上がって引き続きいじめられるのではないかという不安の表れとして見ている。保護者が、今幼稚園できっちり対処してほしいという思いが強いと見ている。幼稚園は保育する人数も多く、経験も重ねているので、大所高所から判断しているのかなという思いは保護者にもある。しかし、親の立場では我が子から「何々ちゃんにいじめられた」と聞くと、絶対に何とかしてほしいという思いを持つ。保護者には見えない分、状況がわからない分、うそを言われたとか、いじめられたと子どもから言われると、額面通り受けて不安になる。

多分、幼稚園の教師はポイントを押さえ、これ以上やったらいけないことなどの指導はされているであろうが、保護者の立場になると、子どもの言う内容を100パーセント信じて、感情的になり何とか対応してほしいと強く望むのであろう。保護者は「先生がどうしてくれたの」、「じゃあ、先生はそのときどう言ったの」、「先生、そのときいたの」、「先生に相談したの」などと尋ねるが、子どもは自分の都合の良いことしか言わないケースが多いと思われるので、「先生は何々ちゃんの味方した」や「自分が怒られた」と言われれば、教師に物足りなさや場合によっては不信感を募らせるのではないかと。

教師は、他人と他人のもめごとの間に客観的に入る立場であるが、保護者は我が子と他人のもめごととして捉えるので、やっぱり可愛い我が子への思いから、我が子に対しては絶対いじめる子になってほしくない、いじめられる子になってほしくないという強い思いが入るのは当然であると分析している。

(4) その他の資質能力

これまで考察してきた教師と保護者との間で顕著な開きが見られた3項目以外では、以下のような点について話題となった。

まず保護者からは、調査項目 NO. 33「地球的規模の問題への関心がある」（環境問題）と、NO. 34「国際社会で通用する」（英語能力）について、次のような意見が出た。

- ・幼稚園の先生方は、毎日子どもたちの世話で忙しく、また幼稚園は毎月様々な行事が次々とあつて、その準備に追われているようだ。
- ・環境問題や英語力も大事だが、そこまで求めるのは気の毒な気がする。
- ・子どもたちにもこのようなことは、もう少し大きくなってから関心を持ってくれればいいので、先生にもそこまでは求めない。
- ・むしろ、今、目の前の子どもをしっかりと見て欲しいというのが、大方の保護者の願いではない

か。

また、教師からも似たような意見があった。すなわち、

- ・環境問題も英語力についても一応関心はあるが、目先のことが忙しくて余裕がない。
- ・まずは日常の保育をしっかりやって、子どもたちの成長を援助したい。

一方、地域住民からはこの2つの項目（環境問題、英語力）に関してはほとんど意見が出ず、他の項目について意見が出た。

- ・「子どもが好きである」が教師、保護者とも数字が高いのは当然のように思うが、このように方向が同じもの（数字が高くて似ているもの）がもっとあってもいいのではないか。
- ・各項目のとらえ方が、教師と保護者とではかなりずれているのではないか。例えば、しつけの問題（NO. 18）など、内容を何に置いているかで違ってくる。具体的に、挨拶なのか、食事のマナーなのかなど示したほうが答えやすい。
- ・教師の思いと保護者の思いとでそれぞれの立場がはっきりしていて面白い調査だと感じた。

以上、その他の資質能力については、聞き取りの時間的制約のためあまり深く聞き出すことはできなかった。それだけ、話の内容が、関心の度合いに顕著な開きのあった3項目に集中したためとも言える。

4. おわりに

以上、教師や保護者がそれぞれ重視する教員資質能力について、その間に大きな開きがあるものを抽出し、教師、保護者、地域の人々それぞれの立場から聞き取り調査を行った。そこからみえてきたことは二つある。

まず第一に、専門的力量的視点である。すなわち、教員としての専門性で現象をみるか、表出する現象をそのままとらえるかという、教員の資質に直結する視点である。保護者とのコミュニケーションをみても、連絡ノートや電話連絡など間接的・直接的に保護者とのコミュニケーションを意識している。つまり、子育て支援において、重要な意味を持つものがコミュニケーションであることを教師は専門性の中に位置づけた上で、日常的教育活動の中に溶かし込んでいる。そのような教育的配慮が保護者には当たり前のように見え、「安心感」や「教師への信頼」などにつながっている。また、同僚とのコミュニケーションも同じで、教育活動における連携などは当然の方法であり、意図的に組織化構造化しなければならない意識が教師にはある。ところが保護者にはこれもまた当然の姿として受けとめられ、「教師は仲がよい」、「いつも楽しそう」と映るのである。また、教師はいじめや嘘においても、専門的見地から子どもの行為の裏にある意味を読み取り、現象面だけをみて叱責したり、その場で解決したりすることを避ける場合が多い。しかし、保護者は、一般的行為の意味づけから、嘘はいけない、いじめはよくないといった価値観から、表出してくる行為のみで判断してしまう傾向にある。このように、教員の専門的力量的が当たり前のように映ったり、本質的に理解されたりしていない場合があることが伺える。

第二に、教育的視点と我が子主義的視点である。すなわち、教師は教育効果や教育の質を上げる

ため、様々な工夫を行っているが、保護者が判断する場面は自分の子どもになっていることが多い。保護者とのコミュニケーションや同僚とのコミュニケーションにおいても、その構築がどのような教育的効果をもたらすかが保護者には関心が薄く、「子どもが元気に帰っているからよい」、「無事帰って帰ってきて笑っていればよい」、「我が子のクラスさえよければよい」などかなり微視的な見方となっている。さらに、毅然とした態度を要求するのも、保護者にとっては「我が子からいじめられたと聞いたら絶対に何とかしてほしい」という願いが強いことがわかる。他方教師としては、けんかなどがあつたとしても、客観的な状況から判断し、さらにはそのけんかの対象となる子ども個々の発達特性や性格などを総合的に判断し、表面的には曖昧に見える対応になってしまうこともある。しかし、これは行為の意味を読み取る専門的力量が発揮されている場面であり、きわめて教育的な営みといえる。

以上二点からもわかるように、教師の資質能力は日常の様々な場面で発揮されていたとしても、それが保護者には見えなかったり、我が子だけの限定的な関係性の中でとらえられたりしていることが伺える。このことからわかるように、微視的關係性から解放し、教育的営みを保護者に説明し理解してもらうための能力が、これらの結果から潜在的に求められていることが見えてくるのではないだろうか。

注・引用文献

- 1) 寅丸尚恵, 濱名浩, 濱名陽子, 森田健, 矢田正一「幼稚園教師に求められる資質能力—幼稚園予備調査の結果分析—」関西国際大学 教育総合研究叢書 第1号 2008年3月 35-61頁

Abstract

Project of Research Institute for Education conducted a preliminary questionnaire inquiry on the competence and ability of teachers at kindergartens and elementary schools in fiscal year 2007. In order to further deepen the analysis, interview was made to teachers, parents and local people in fiscal year 2008.

In this paper, three competence and ability of teachers respected by kindergarten teachers and parents were focused and discussed based on the above mentioned interview.